

# 中世フランスの写本メディアと ナショナル・アイデンティティ形成 に関する研究

---

The Media and National Identity  
Historical Writing in Medieval France

教育学部 准教授 鈴木道也









## はじめに ―叙述史料研究の可能性―

### ・ 国民国家形成期に成立する近代歴史学と歴史叙述

→ ナショナル=アイデンティティ形成のひとつの核

(テッサ=モーリス =スズキ)

→ 近代ナショナリズムによって「汚された」過去

(パトリック=ギアリ)

### ・ 中世における歴史家の世界認識

→ キリスト教的世界観に基づいてキリスト教共同体の

アイデンティティを表象する『普遍年代記』

→ 13世紀以降、近代ネーション以前の多様な国家（王国）

イメージを表象する『王国年代記』の俗語による制作

→ 中世的国家観、中世的権力関係解明のひとつの手がかり

……表象される意識、構造の持続性



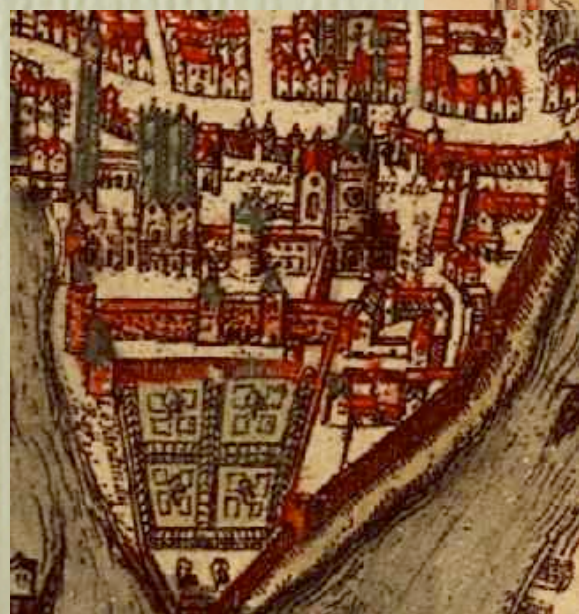


ルーブル城



サン＝ドニ  
修道院

王宮







## 『フランス大年代記』



# 『フランス史』成立過程ーフランス観の変容ー

- 13世紀後半：トロイア起源=王朝史的フランス  
→例：サン=ドニ修道院編『フランス大年代記』
- 15世紀末：ガリア起源=王朝史的フランス  
→例：エティエンヌ=パキエ編『フランス考』
- 19世紀前半：ロマン主義=民族史的フランス
- 20世紀初め：実証主義=国民史的フランス史



# 『フランス大年代記』の生成・変容

## ー「フランス史」の誕生、第一期ー

サン＝ドニ修道院での修史事業

ルイ9世

ロワイヨール修道院での修史事業

- 1274年：プリマ版完成  
→国王フィリップ3世への献呈

課題①

- 1344-56年：リシャール＝レスコによる再編

- 1244年：ヴァンサン＝ド＝ボーヴェ編『歴史の鑑』成立
- 1254年：改訂版『歴史の鑑』成立

課題②

1344年：俗語版『歴史の鑑』制作

ヴァロワ王権内部での修史事業

シャルル5世

- 1380年：ピエール＝ドルジュモン版完成「シャルル5世の大年代記」



# 本研究プロジェクトにおける課題①

→現存する120点以上の大年代記写本の多くは14世紀後半から15世紀にかけて制作されたもの（「シャルル5世の大年代記」が原本）であり、13世紀末から14世紀半ばまで、この年代記に対する聖俗有力者の関心はかならずしも高くはない。

（表参照）

→この間、いかなる「フランス史」が記され、  
そしてそれがどのようにして「正史」としての  
「シャルル5世の大年代記」へ収斂してくるのか？



# 表：『フランス大年代記』の初期写本群（1274-1375）

|   | 写本番号・所蔵   | 記述年代             | 写本制作依頼者あるいは所有者と思われる者  | 備考                               |
|---|---|------------------|---|----------------------------------|
| a | British Library (London) Add.Ms.38128   | 起源～フィリップ2世治世     | ?   |                                  |
| b | Bibliothèque Royale de Belgique (Bruxelles) Ms.4  | 起源～フィリップ2世治世     | ?   |                                  |
| c | Bibliothèque Nationale(Paris),Ms.fr.2814  | 起源～フィリップ2世治世     | ?   |                                  |
| d | Bayerische Staatsbibliothek(Munich),Cod.Gall.4  | 起源～フィリップ2世治世     | ?   |                                  |
| e | Bibliothèque Sainte-Geneviève(Paris),Ms.782   | 起源～フィリップ2世治世     | フランス王国蔵書目録（1411年、1413年、1423年）に記録あり                                    |                                  |
| f | Bibliothèque Municipale(Saint-Omer),Ms.707  | 起源～フィリップ2世治世     | ?   | サン＝トメール教会に関する追記あり                |
| g | 個人蔵(スイス)  | 起源～フィリップ2世治世     | ①ブルゴーニュ公ジャン（1371-1419）の署名<br>②ブルゴーニュ公フィリップ（1396-1467）蔵書目録（1467年）に記録あり |                                  |
| h | Société des Autographs des Manuscrits Français(Paris),Ex-Bute Manuscrit(委託先 Bibliothèque Nationale) | 起源～ルイ8世治世        | ベリー公ジャン（1340-1416）の署名   |                                  |
| i | Bibliothèque Royale de Belgique (Bruxelles) Ms.14561-14564  | 起源～ルイ9世治世        | ?   | 14世紀後半パリ制作の二写本と別の場所で制作された一写本の集成版 |
| j | British Library(London),Royal 16 G VI   | 起源～ルイ9世治世        | グロスター公ハンフリー（1414-1447）の署名   | サン＝ドニ修道士ピエール＝ドルジュモンによる追記あり       |
| k | Bibliothèque Municipale(Reims),Ms.1469  | 起源～フィリップ3世治世途中まで | ランス聖堂参事会?   | ランス教会史に関する追記あり                   |
| l | Bibliothèque Nationale(Paris)Ms.fr.2615   | 起源～フィリップ3世治世     | ?   |                                  |
| m | Bibliothèque Municipale (Cambrai) Ms.682  | 起源～フィリップ3世治世     | カンブレ助祭長ラウル＝ル＝ブレットル（1443）の署名   |                                  |
| n | Bibliothèque Royale de Belgique (Bruxelles) Ms.5  | 起源～1321年         | ブルゴーニュ公フィリップ（1396-1467）蔵書目録（1467年）に記録あり                               |                                  |
| o | Bibliothèque Nationale (Paris) Ms.fr.10132  | 起源～1329年         | ①シャルトルのバイイ、ピエール＝オノレ筆写依頼の前文<br>②ショーモン領主ピエール・ダンボワーズ（-1473）の妻アンヌ・ド・ブユの署名 |                                  |
| p | Bibliothèque Municipale(Lyon),Ms.880  | 起源～フィリップ6世治世     | ①シャルル6世の署名<br>②ベリー公ジャンの署名   | サン＝ドニ修道士 リシャール＝レスコによる加筆あり        |
| q | Bibliothèque Nationale(Paris),Ms.fr.17270   | 起源～フィリップ6世治世     | リュジニヤンの軍司令タンギー＝ド・シャテルの署名  | サン＝ドニ修道士 リシャール＝レスコによる加筆あり        |
| r | Bibliothèque Nationale(Paris),Ms.fr.23140   | 起源～フィリップ6世治世     | ?   | サン＝ドニ修道士 リシャール＝レスコによる加筆あり        |
| s | Bibliothèque Municipale(Chartres),Ms.271  | 起源～フィリップ6世治世     | フランス王国尚書官ギョーム＝フロットの妻ジャンヌ＝ダンボワーズ（-1341年）の署名                            |                                  |



# 『フランス大年代記』の生成・変容

## ー「フランス史」の誕生、第一期ー

サン＝ドニ修道院での修史事業

- 1274年：プリマ版完成  
→国王フィリップ3世への献呈

課題①

- 1344-56年：リシャール＝レスコによる再編

ルイ9世

ロワイヨール修道院での修史事業

- 1244年：ヴァンサン＝ド＝ボーヴェ編『歴史の鑑』成立
- 1254年：改訂版『歴史の鑑』成立

課題②

1344年：俗語版『歴史の鑑』制作

シャルル5世

ヴァロワ王権内部での修史事業

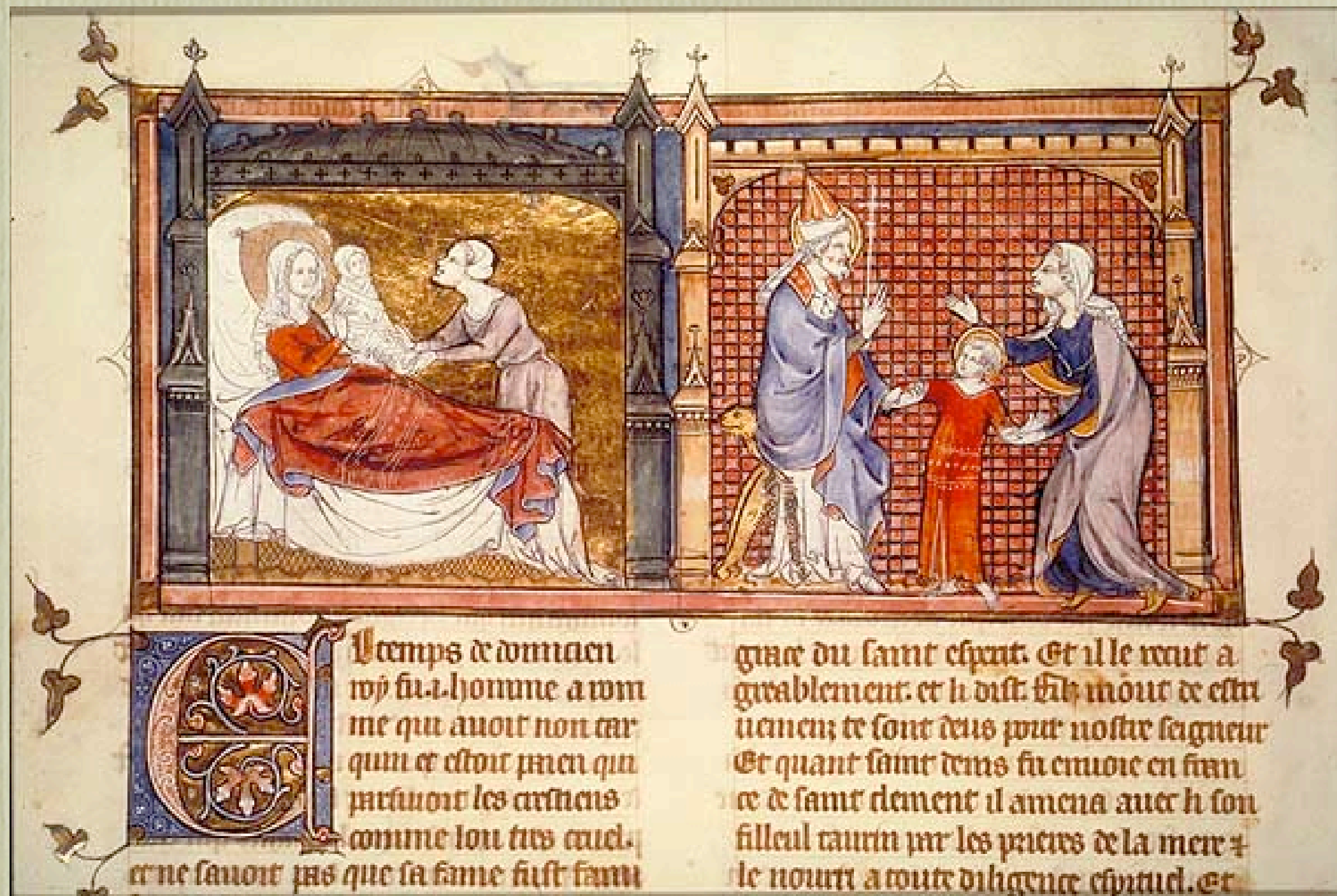
- 1380年：ピエール＝ドルジュモン版完成「シャルル5世の大年代記」



ロワイヨールモン  
修道院







## 『歴史の鑑』



## 本研究プロジェクトにおける課題②

- 13世紀後半、カペー王権周辺で生み出された『フランス大年代記』と『歴史の鑑』という二つの歴史叙述  
(前者は俗語で記された「王国年代記」、後者はラテン語で記された「世界年代記」)
- 『フランス大年代記』の不振の一方で、『歴史の鑑』は広く普及
- 二つの史書のなかに現れる「(フランス)王権」観、  
「(フランス)王国」観の比較を通じて、当時の  
「国家」、およびその集合的記憶としての「国家史」の  
基本的性格を考える。



## \* 研究手法に関して

- 「引用のモザイク」としての中世史書

→過去の史書を一定の方針のもとに取捨選択し、そこに追記を施しながら編纂されていく中世の歴史叙述は「引用のモザイク」であるが、成立した作品を典拠ごとに断片化していくのではなく、全体としてどのような歴史認識を示すことになるのか、が問われるべき

=典拠構成に関する分析



# \* 研究手法に関して

## ・ 可変的メディアとしての中世写本

→中世史書は、原本は同じでも、個々の写本のなかに依頼者-制作者-読者の固有の歴史認識が反映されており、  
その位相差は捨象されるべきではなく、意味を問われるべき  
=写本間の異同に関する分析



# 課題 1：サン＝ドニ修道院におけるプリマ以後の修史活動

## 検討事項

- A:13世紀末から14世紀初にサン＝ドニ修道院で生み出された史書群の体系性
- B:Aのなかで『大年代記』類似の構成を持つ『フランス語版フランス諸王年代記』の内容・成立背景、
- C:14世紀前半リシャール＝レスコによる『大年代記』改訂作業の動機と内容
- D:『大年代記』におけるフィリップ6世治世(位1328-1341)[王朝交代期]の記述とその情報源。



# 課題 1：サン=ドニ修道院におけるプリマ以後の修史活動

## 検討結果 その1

- ①13世紀後半から14世紀前半のサン=ドの修史活動は、  
＜Chronicon＞→『フランス語版諸王年代記』→その続編、  
といった流れが主流でギョーム=ド=ナンジのラテン語著作  
を軸に展開。
- ②プリマの『大年代記』は、その「先進性」（王朝史の王国史  
としての自律、俗語の使用）ゆえ修道院内部におけ史書編纂  
事業の核にはならず
- ③リシャール=レスコ版は、王朝交代を含む13世紀後半から14  
世紀前半期を「王と諸侯の物語」である『大年代記』の枠組  
で叙述しつつも、かかるサン=ドニの伝統に従い、叙述の範  
囲、叙述スタイルにおいてプリマ版と相違



# 課題 1 : サン=ドニ修道院におけるプリマ以後の修史活動

## 検討結果 その2

- ④ 普遍年代記の記述 (<Chronicon>) を多く取り込むことで、あるいは複数の史料を幅広く参照することで、リシャール=レスコ版はプリマ版に比べ、より「国際的」で「物語的」な性格
- ⑤ リシャール=レスコによる改訂作業を経ることでフィリップ 6 世治世を織り込んだ『大年代記』は、カペー朝とヴァロワ朝という二つの王朝の「正史」としての形式と内容を具有



## 課題2：世界年代記『歴史の鑑』と『大年代記』の 内容構成・普及過程との比較

### 検討事項

A：『歴史の鑑』の成立とその構成、

B：『歴史の鑑』第一版と第二版との間の内容的差異とその背景

1メロヴィング朝からカロリング朝への交代期について、

2シャルルマーニュの後継者について、

3ルイ七世の結婚について、

4十字軍の遠征について



表：『歴史の鑑』全巻の構成

| 巻  | 記述年代（西暦）   | 概要   |
|----|------------|--|
| 1  |            | 天地創造からヤコブの子ヨゼフの死まで   |
| 2  |            | モーゼ誕生からダニエルの預言、<br>トロイア王国およびトロイア戦争、<br>ロムルスとレームスによるローマの建国                    |
| 3  | 紀元前550-358 | ペルシア帝国の大キュロス、アルタクセルクセス、アルタクセルクセス3世治世   |
| 4  | 紀元前356-323 | アレクサンドロス大王治世   |
| 5  | 紀元前323-48  | アレクサンドロス帝国の分割からカエサル統治  |
| 6  | 紀元前48-紀元14 | カエサルおよびアウグストゥス統治   |
| 7  | 14-41      | ティベリウス帝、カリグラ帝治世、<br>キリスト教の誕生   |
| 8  | 41-54      | クラウディウス帝治世   |
| 9  | 54-69      | ネロ帝治世など  |
| 10 | 69-192     | ウェスパシアヌス帝など  |
| 11 | 193-284    | カラカラ帝治世など  |
| 12 | 284-305    | ディオクレティアヌス帝治世など  |
| 13 | 306-337    | コンスタンティヌス帝治世   |
| 14 | 337-378    | コンスタンティウス2世、ユリアヌス帝治世など   |
| 15 |            | バルラームとヨサファトの物語   |
| 16 | 375-383    | グラティアヌス帝治世、<br>ペルシア帝国について  |
| 17 | 379-395    | テオドシウス帝治世  |
| 18 | 395-408    | ホノリウス帝、アルカディウス帝治世  |
| 19 | 408-423    | ホノリウス帝治世   |
| 20 | 423-491    | テオドシウス帝治世など  |
| 21 | 491-582    | アナスタシア、ユスティニアヌス1世帝治世など   |
| 22 | 582-610    | マウリキウス帝、フォカス帝治世など  |
| 23 | 610-801    | カールマルテル、ペパン、シャルルマーニュ治世まで   |
| 24 | 801-1002   | シャルルマーニュ治世からオットー3世治世期まで、<br>イングランド王朝、フランク王朝史                                 |
| 25 | 1002-1106  | ハインリヒ2世、コンラート2世、ハインリヒ3世、ハインリヒ4世治世、<br>ノルマンディー公ウィリアムのイングランド征服、第一回十字軍、など       |
| 26 | 1106-1125  | ハインリヒ5世治世、<br>サン=ヴィクトルのユーゴーの著作、<br>ランのノートル=ダム <small>＝</small> の奇蹟、聖ヤコブの奇蹟など |
| 27 | 1125-1152  | コンラート3世治世  |
| 28 |            | クレルヴォーのベルナールの著作からの選集   |
| 29 | 1152-1212  | フリードリヒ1世、ハインリヒ4世、オットー4世治世、<br>フィリップ2世治世、タタール族の侵入                             |
| 30 | 1212-1244  | フリードリヒ2世治世（第一期の編纂事業では30巻が最終巻）  |
| 31 | 1244-1253  | リヨン公会議から1253年まで  |

SHのテキストは、ナンシー第二大学の  
l'Atelier Vincent de Beauvais制作  
のテキストデータベース  
(<http://atilf.atilf.fr/bichard/>  
原典は Douai B.M. Ms.797)を利用



## 課題2：世界年代記『歴史の鑑』と『大年代記』の 内容構成・普及過程との比較

### 検討結果 その1

- ①第一版は、その構成上キリスト教的世界観に基づいてキリスト教徒共同体のアイデンティティを表象する普遍年代記の形式に忠実
- ②フランク（フランス）王およびその王国の歴史的位置づけは、キリスト教世界を構成する一有力諸侯とその地域史
- ③1254年の修正版における修正の目的は、カロリング家のペパンからカペー家のルイ9世までのフランク（フランス）王朝の連続性を証すことにあり、方向性は大年代記と共通しているが、王朝間の関係性について、『歴史の鑑』では、ルイ7世の結婚とその子フィリップ2世の誕生により「シャルルマーニュの血統」に回帰したことを先ず重視



# 課題2：世界年代記『歴史の鑑』と『大年代記』の 内容構成・普及過程との比較

## 検討結果 その2

- ③次いで王権の正当化にとって重要なのは、カペー朝、とりわけルイ9世が教皇や教会と良好な関係を維持する理想的なキリスト教的統治者<christianissimus>であったこと
- ④普遍史の文脈に織り込まれたカペー的王権観は、13世紀後半から14世紀前半というカペー朝末からヴァロワ朝成立にかけての混乱期にあって、少なくともGCFよりは多くの読者を獲得



## まとめと今後の課題

### • プリマ版『フランス大年代記』の「先進性」

- 13世紀後半段階にあって「国家史」の叙述は始まったばかりで、いまだ完結性に乏しく、普遍的世界観と王朝史を組み合わせたものに過ぎなかった
- 王朝史を王国史として独立させた『フランス大年代記』の試みは先進的であったが、その定着のためには現実の「フランス」がもう少し政治的経験を重ねることが必要であった（王朝交代と百年戦争）
- 『歴史の鑑』の編者ヴァンサン、『フランス大年代記』の編者プリマ、再編者リシャール=レスコ、彼らの「フランス」観は構成員を支配階層に限定するエリート的なもの



## まとめと今後の課題

- 「王と諸侯の」から「フランス国民の」フランス史へ
  - 13世紀後半：トロイア起源=王朝史的フランス  
→例：サン=ドニ修道院編『フランス大年代記』

アイデンティティ形成を主導する王権が、  
いつ、どのようにして「(フランス)国民」を「発見」し、  
動員の具体的な手段として 歴史を用いるようになるのか？  
=国家観国民観の変容

- 15世紀末：ガリア起源=王朝史的フランス  
→例：エティエンヌ=パキエ編『フランス考』